

「雪のあし跡 2 (ニホンカモシカ)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

雪が積もると、とにかく動物の行動がわかりやすくなる。動物が「通行」したあとには、必ずあし跡が残るからだ。あし跡を残さないのは、飛べる動物と幽霊だが、幽霊はもともと足がないものが多いので、対象から除外される。



あし跡の種類によって、残されている場所も異なる。大きな樹木を「尋ね歩くように」残ったあし跡、雪原を一直線に横切っているあし跡などだ。上の写真は台地と崖の境界線のような場所を好む動物で、時には、ヒトは容易に近づけないような崖の斜面を上り下りした跡も残っていることがある。



あし跡そのものもかなり大型で、積雪が多くあしがもぐっている時は、クマのあし跡かと、ギョっとすることもある。しかしクマ(ツキノワグマ)は、今の時期冬眠しているので、雪の上にあし跡が残ることは稀である。

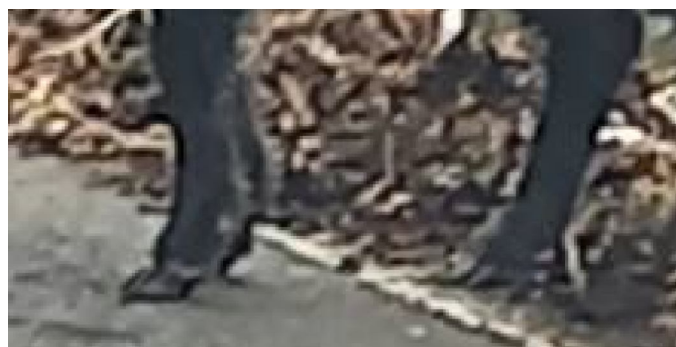


(北軽井沢二度上峠・黒岩さん撮影)

この大きなあし跡の主は「カモシカ」である。カモシカは「シカ」の和名を持つが、シカの仲間ではない。シカ(ニホンジカ)は鯨偶蹄目・シカ科だが、カモシカ(ニホンカモシカ)は、ウシ目・ウシ科で、共通する分類単位は「哺乳綱」までさかのぼる必要がある。つまりシカとはほぼ無縁の動物だ。



カモシカのあし跡は、写真のように非常に特徴的なので、まず見間違えることはない。2つに分かれた趾先がやや開いた「V字型」になったものが、点々と続いている。カモシカは前肢と後肢の間隔も大きいので、あし跡の間隔も広い。



実際のカモシカ趾先を観察すると、あし跡と合致することがよくわかる。雪上のあし跡からは、動物の行動だけでなく、形態の一部も推理できるのである。